

豊かなセーフティネットを紡ぐこども食堂

福岡県糸島市 いとしまこども食堂ほっこり





「コミュニティの一員であるということ」。ステイホームを余儀なくされ、多くの人々が孤立せざるを得ないコロナ禍の下、こうした意識は人々に安心感を与えるのではないだろうか。また、そこに住み、働き、学ぶ人々が、地域の活動に参加し、その地域の一員という意識が育まれることで、より豊かなコミュニティが生まれる土壌にもなるのではないか。

近年、移住者が増えている福岡県糸島市で、様々な背景を持った子どもを支えながら、地元の方々や学生や留学生といった新しくコミュニティに入って来た人々をつなぐ居場所である「いとしまこども食堂ほっこり」（以下「ほっこり」）は、2016年に同団体の代表である笹瀬隆広さんが立ち上げた。

「ほっこり」の主な活動は、子ども食堂と学習支援といった地域の子どもを支える活動の他、糸島市内でもこども食堂のネットワークを設立し、「ほっこり」が培ってきた多様な団体との連携を生かし、地域の子ども支援団体を後方からサポートする中間支援も行っている。今回、「ほっこり」が同市小学校区の子どもの居場所である「ほっとカフェぬくもり寺子屋」と協働する現場取材した。

「ほっとカフェぬくもり寺子屋」は、「ほっこり」の活動に参加していた金ヶ江さんが、地域のこどもたちの孤食・貧困問題に直面したことを契機に、開設を模索。2020年に校区まちづくり事業としてみんなの居場所を立ち上げたが、この11月23日にそれまでの居場所づくりに加え、新たな取り組みとして、みんなの食堂を開催することとなった。

当日の午前9時。地域のお母さんボランティアの方々が集まり、調理を開始。この日の食材は、「ほっこり」とつながりがあるJA糸島女性部と富士食品株式会社、大法寺仏教婦人会、ハンドボールの日本リーグで糸島が拠点のクラブチーム「ゴールデンウルヴス福岡」などからの寄付である。10時からカフェがスタート。近くの小学校などから来た子どもたちは、上階にある学習の場と自由に過ごせる場を思い思いの時間を過ごす。そこには地域の高校生ボランティアや、「ほっこり」に所属する大学生が子どもたちと一緒に遊び、また勉強する光景があった。11時30分には調理が終わわり、食事開始。この日の献立は、おにぎりと味噌汁、卵焼き、野菜の天ぷらと野菜の茶わん蒸し、スイートポテト、みかん。子どもたちはおいしそうに食べていた。

14時になって、カフェは閉店。片づけの後、振り返りをして、「ほっとカフェぬくもり寺子屋」はこの日の活動を終えた。

多様な団体が無理なく連携し、活動している「いとしまこども食堂ほっこり」。この豊かな連携が生まれるのはなぜだろうか。そんな疑問を解消するべく、「ほっこり」の活動に参加する方々に話を聞いた。

九州大学の大学院生の中島さんとアメリカから来た学部学生のエリックさん。二人は大学生と留学生をまとめる学生代表でもある。「ほっこり」に参加して二人の地元では感じることができなかった人とのつながりを体感。特に、エリックさんは「外国人としてではなく、人間としてコミュニティの一員になれている」と、嬉しそうに話した。

食材と調理のサポートをされているJA糸島女性部の廣

須古井さん・吉村さん



国分さん



中島さん・エリックさん



留学生も参加した子ども食堂のイベントの様子



瀬戸さん



金ヶ江さん・笹刈さん



井上さん



廣川さん・岡崎さん



中原さん



川さん・岡崎さんは、この地域で食に困っている人がいるという現実には衝撃を受け、できることを探している中で「ほっこり」を知り、活動に参加。食育と農の文化を通じて様々な人との出会いを楽しんでいる。調理・交流の支援を担当する糸島市更生保護女性会の須古井さんと食材・交流の支援をする大法寺仏教婦人会の吉村さんは、地域の若い人との交流が楽しさの一つになっているという。「ほっこり」の活動について糸島保護区保護司会長の瀬戸さんは、犯罪をなくすためにも食べることに・住むことの確保が重要で、その一助になっていると話す。

卵焼きを提供する富士食品株式会社社長の井上さんと野菜を提供するゴールデンウルヴス福岡の国分さんは、私たちはお客さんではない。地元企業、仲間として地域活動に参加することで、地域と顔の見える関係が築かれ、社会貢献の一つとして企業が得意に取り組む姿勢にも触れる。子どもたちのイベントで使用するバスを提供している株式会社イトキュー社長の中原さんは、生まれも育ちも糸島で、現在、子育て中。そんな中原さんは、糸島に恩返しをするため、この支援をはじめ、人と人とのつながりの大切さを再確認できているとのことだった。

代表の笹刈さんは、小学生には世の中に他人がいることを知って欲しい。中学生には社会の仕組みを学んで欲しい。大学生には自分がやったことで笑顔になる人がいることを知って欲しい。高齢者には生きてきた経験と知恵を分けて欲しい。「自分さえ良ければ」という考えではなく、地域の皆さんと共に歩んでいきたい。子どもだけではなく、一人ひとりが地域の宝です」との思いを明かしてくれた。